

● 4世紀～7世紀 強化されていく王権 ●



●日本武尊（小碓王）

伝説上の人物。四道将軍など各地に遠征した豪族たちの業績を一人に集約したキャラであろう。この時期こういう手荒な征服戦争が行われたという痕跡は見つかっておらず、別の時代の話が元ネタである可能性もある。



●神功皇后（気長足姫尊）

4世紀末に高句麗が南下すると、大和政権は同盟国伽耶を救援するため派兵した。この「三韓征伐」を指揮したのが神功皇后とされるが、実際には派遣された兵士たちが信仰する海の女神を後世になって皇統に組み入れたものか。高句麗と接触することで、「王は太陽神の子孫であり、他の家系とは格が違う」というツングース系の神話が初めて日本にもたらされたらしい。この発想が定着するのは三百年後、日本書紀が書かれてからである。当時の大和政権の王は豪族連合の盟主というに過ぎず、世襲されるべき地位とも考えられていなかった。



●葛城襲津彦

外戚として繁栄した葛城氏の祖。半島派遣軍の司令官で、長年現地にとどまり対外交渉も行った。また、秦氏など技術者氏族を渡来させている。日本書紀は彼の業績を詳述する一方、同時期の応神天皇の業績は何も語らない。襲津彦が大和政権の盟主だったようだ。



●仁徳天皇（大鷦鷯尊）

初の公共土木事業である茨田の堤の建設など、湖沼だった河内（大阪）の開拓を行い、難波高津宮に遷都した。国の事業として開拓された土地は王の直轄地「屯倉」とされた。屯倉が増えることで王の権力は強くなっていく。



●雄略天皇（大泊瀬幼武尊）

初めて中央集権化を推し進めた王。万葉集などは彼を最初の王として扱う。兄の安康天皇が眉輪王（7歳）に暗殺された混乱に乗じ、ライバルたちを抹殺して王位についた。当時最強の豪族だった葛城氏を滅ぼしたほか、最大の地方勢力である吉備氏も征服した。このとき没収した領地は屯倉となる。



●飯豊天皇（飯豊青皇女）

清寧天皇の死から顕宗天皇の即位までの十か月間、顕宗の姉（または叔母）の飯豊青皇女が政務を執っていたとされ、飯豊天皇と呼ばれることがある。結婚していないので巫女と考えられている。邪馬台国の卑弥呼や台与のような巫女が大和政権内にもいて、男王と並立していたのかもしれない。王の空位期間中、巫女が王の職を兼務したということになる。また、清寧はアルビノで病弱だったらしく、生前から彼女が摂政をしていた可能性もある。



●継体天皇（男大迹王）

息長氏出身の王。武烈天皇の死後、物部氏や大伴氏に擁立される形で即位した。息長氏は近江（滋賀）を本拠地とする地方豪族で、他に先駆けて国内での製鉄を開始し、力をつけていた。結果的にだが、彼が皇室の直接の先祖となった。ただし皇后の手白香皇女は雄略天皇の孫なので、息子の欽明天皇は雄略の血統でもある。



### ●物部荒鹿火

大和政権最強の武将。磐井の乱を平定した。

日本書紀では筑紫君磐井が新羅と結んで謀反を起こしたとするが、中央集権化を図る継体天皇が先に仕掛けたという説や、それまで別の国家だった磐井をこの時初めて征服したという説もある。



### ●蘇我馬子

蘇我氏の出自は不明だが、葛城氏の傍系と思われる。渡来系の技術者を配下にし、殖産興業で栄えた。

用明天皇の死後、物部守屋が穴穂部皇子を擁立したが、馬子は丁未の乱で両者を滅ぼし、崇峻天皇を即位させた。さらにその崇峻も殺害し、馬子は権力を確立する。



### ●推古天皇（豊御食炊屋姫尊）

蘇我馬子は自ら王位につくことなく、姪の推古天皇を傀儡として立てた。それが事実とすれば、当時既に皇室の血統が相応の権威を獲得していたことになる。

また、推古は政治感覚に優れた人物で、優秀な聖徳太子を摂政にするなど、巧みに皇室の勢力を維持した。



### ●聖徳太子（厩戸皇子）

隋書では600年と607年に遣隋使を送った倭国王は阿毎・多利思北孤という名の男性とされる。608年には来日した裴世清がその王に面会している。「アメ・タラシヒコ」は人名ではなく尊称だろうが、女性の推古天皇とは別人のはずだ。

この件は通常、聖徳太子が実際には王に即位していたと解釈される。その事実を歴史から抹消したのは、太子の息子の山背大兄王を滅ぼした勢力であろうか。他に、この倭国王は蘇我馬子だという説もある。



### ●天智天皇（中大兄皇子）

乙巳の変で蘇我入鹿を暗殺した。3代続いた蘇我氏政権は「蘇我氏の支配者+傀儡の皇族」のペアで構成されるもので、入鹿とペアを組んでいた皇極天皇もこのとき退位させられた。乙巳の変がなければ蘇我氏は後に天皇家となり、それに沿った内容の神話が今に伝わっていたに違いない。

親新羅の蘇我氏が滅びた結果、大和政権の対外政策は百済一辺倒となり、白村江の敗戦へと転落の道を歩んでいく。



### ●持統天皇（鸕野讚良姫尊）

天武天皇の皇后。夫の死後、飛鳥浄御原令や藤原京などの政策を引き継いだ。

天武と自分の直系子孫による皇位継承にこだわり、他の皇族が即位するのを全力で阻止した。自分が即位したのもその一環と考えられる。そして日本書紀の編纂により、ついに皇室の神格化が完成した。天照大神は持統がモデルであり、天孫降臨神話は天武系の正統性を主張する目的で書かれている。



### ●藤原不比等

大宝律令を編纂するなど律令国家の生みの親であり、日本最強の氏族藤原氏の始祖となった人物。

壬申の乱後の中臣氏には何の力もなく、不比等は個人の実力でゼロから右大臣まで上り詰めた。つまり彼は豪族ではなく官僚、公卿と呼ばれるべきである。ただ、彼の本当の父は中臣鎌足ではなく天智天皇だという説が当時からあり、事実上の皇族として暗黙に遇されていた可能性はある。